

# 月報

<449号>

ケルン・ボン日本語  
キリスト教会  
二〇二〇年八月三十一日発行

## 「曲がり角の向い」

佐々木良子

「いま曲がり角にきたのよ。曲がり角をまがった先に何があるのかは、分からないの。でも、きっと一番良いものに違いないと思うの。それにはまだ、そのすてきな良い所があると思っわ。その道がどんなふうに伸びているか分からないけれど、どんな光と影があるのか。どんな景色が広がっているのか。どんな新しい美しさや曲がり角や、丘や谷が、その先にあるのか、それはわからないの。」

『赤毛のアン』より

孤児であった主人公アン・シャーリー (Anne Shirley) が、様々な試練と逆境の中でも諦めず、いつも明るく乗り越え、教師として成長してゆくという内容の本です。

今年はコロナ禍と共に年が明け、二〇二〇年も残り少なくなりました。今年前半を振り返ってみますと、世界中が思いもよらない状況に翻弄され、時間の経過と共に先の見えない将来をどのように捉えていったらよいのか、思い巡る日々だったと思います。冒頭に記したように、「曲がり角の先にあるものを」、「一番良いものに違いない」と、分からないことからのことを肯定的に見つめているアンの姿を、最近ふと思い出し、彼女の言葉から多くのことを教えられたように思われています。

私たちの心の中には希望と不安がいつも同居しています。人は不安や心配事を握りしめて、簡単には手放すことができないものです。祈って神に委ねる

ことにより、新しいステップ、希望へと繋げてゆくことができるようになります。

希望は神から与えられる、と聖書に記されていますが、特に詩編に多く見られます。「希望」と訳された原語は、「待つ、熱心に期待して待つ」といった意味がもつてあって「忍耐 *hupomonē*」と訳される言葉を用いていることも、この原語のニュアンスを補うものです。

どのようなことがあっても、神への信頼をやめない、苦しみの中であっても、忍耐をもって神を待ち続けること、そのようにして苦難と切り離せない仕方で希望は生み出されます。信仰とは、神を待ち望むことです。神は求めるものに応えられ、与えるお方です。

「わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望は私たちが欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」(ローマの信徒への手紙第五章三〜五節)と、パウロは言い切っています。

しかし、失敗や挫折、苦難、試練等、私たちに与っては避けたいような負の要素を受け止めるだけでも、精一杯にも拘わらず、更に忍耐するということとは、至難の業だということを私たちは知っています。それは一朝一夕にできることではなく、信仰生活を長く送る中で、経験を積んでゆくことで少しずつ、御言葉を体験することができ分かってゆくものです。

先ほどの物語に登場したアンですが、最終的には大学進学を諦め、地元の小学校で教えることになりました。しかし、表面的には諦めたようにみえますが、彼女は最後まで希望を持ち続けていきます。このようなやりとりがあります。アンに対して叔母さんが「進学をやめて本当に良かったと思っよ。女が男と同じように大学に行くとラテン語とかギリシ

ヤ語とか馬鹿げたものを詰め込むなんて、私は感心しないよ。」と言います。それに対してアンは「でも、リンド叔母さん、私、大学へ行かなくても、ラテン語やギリシヤ語をやったり勉強するのです。私このグリーンゲイブルズで文科コースを取って大学でやるものは残らず勉強しよう決心してるの。」と、答えます。大学のキャンパスにはいなくても、自宅で頑張るつもりだと…。

この物語をさらりと読むならば、「ああ、彼女は何とスバラシイ!」と、終わってしまうかも知れません。教師になるまでの道のりは、多くの時間を費やし、大きな苦難、困難の曲がり角を何度通ったことでしょうか。その度に忍耐を持って、押し合い希望を持ち続けたのです。

「患難が忍耐を生み、忍耐が練達を。練達は希望を生む。」それは時間が経たないとわからない事です。信じて一歩踏み出して、そして神を信じる人生を自分なりに始めて、納得するには、時間がかかります。試練という泥の中で、自分の信仰が純化されていきます。希望につながるということは、頭で分かるものではありません。神の語りかけをこの心に受け止めたいと思っつのです。

あまりにも苦難が大きいと卑屈な人間になる場合もあると思いますが、しかしパウロは、必ず希望へと続くのです。私たちの今のこの時、この試練を通して信仰が純化されていくなれば、幸いです。

これから私たちは、どれほどの曲がり角を通らされるかわかりませんが、一番よいものに違いないと希望を持ち続けて歩んで参りたいです。



「コロナ禍の中での集会の恵み」

「スカイプ礼拝、集会に参加して」

ドレーアー京子

今年のカレンダーは、沢山の予定が取り止めになつたため、メモを消した黒い線が目立ちます。孫と一緒に母を訪問する予定だった四月の里帰り、毎年恒例のいとこの会、友人の誕生パーティー等々、楽しみにしていた行事が次々とキャンセルされました。娘たちから贈られた三月上旬のコンサートは、行くかどうかずいぶん迷ったのですが、結局行くことにしました。しかしコンサート会場では空席が随分あり、コロナ感染を心配する人々が次第に増えている状況が分かりました。

四月に入り、コロナ感染拡大防止措置として大勢の人が集まる集会等が禁止となり、教会での礼拝もできなくなりました。ケルン・ボン日本語教会ではスカイプを通して礼拝を守ることになり、北ドイツに引っ越した私にも連絡が入りました。どういう形の礼拝になるのか想像がつかなかったのですが、前日に送られてくる週報の通り、前奏に始まり祝福で終わるといふ、教会での礼拝とほぼ同じでした。ただ、複数の人が同時にマイクを使用すると雑音が入り聞きづらくなります。それで、牧師、司式者、伴奏者が、自分の担当の箇所だけマイクを入れることになりました。礼拝終了後は全員マイクとビデオのスイッチを入れ短い挨拶を交わし、新しい一週間の恵みを祈ります。また、月に一度聖餐式も執り行われ、佐々木先生の言葉を聞きながら聖餐に与かります。

以前、「人」という字は、二人の人間がお互いに支えあっている姿を形とっていると聞いたことがあります。それが、コロナ禍によって人間関係に溝ができ、あたかも平行線になってしまったような気がしていました。しかしコロナ禍という同じ原因で始まったスカイプ礼拝で、私のように遠くに住む者にも礼拝参加への機会が与えられ、また、日本からの出席者もいて新しい信仰の友が与えられたという事実もあり、近くを引き離して遠くを近づけるといふ、時間と空間を超えた不思議な力を感じます。

礼拝同様に、聖書の学び会もスカイプによって行わ

れています。讃美歌で始まり、佐々木先生のお祈り、聖書の輪読、分かち合い(出席者の質問・意見・体験談)、そして主の祈りで終わります。これまでの学び会と異なり遠くからの参加者もいますので、分かち合いの時に様々な意見、経験を聞くことができます。洗礼までの道はそれぞれ異なりますが、一緒に聖書の箇所を読み、話し合っているうちに、共感できる何かが心の中に湧いてきます。

六月以降教会での礼拝が再び可能になり、ケルン・ボン教会は第二日曜日の礼拝を教会で守ることになりました。しかしその際にも、スカイプを通して全員が参加できるように配慮して下さっています。第一回目の礼拝写真を見せていただきました。他人との距離を、五メートル置く、讃美歌を歌ってはいけない、礼拝後の愛餐会は禁止、等々、規制は沢山ありますが、久しぶりに礼拝堂に集った方たちの笑顔が印象に残りました。

「わたしの主、わたしの神よ」―弟子トマススの信仰告白―

北野節夫

「おはようございます。お元気ですかー!!」良子先生とケルン・ボン教会(以下「StB教会」)の皆様の笑顔と晴れやかなお声がパソコン画面いっぱいに拡がり四月十九日(日)、StB教会のスカイプによるご礼拝が始まる。

ドイツ、日本そして世界中が新型コロナウイルス感染の影響により教会での礼拝が困難ななかにあつて、パソコンを通じてではあるが、礼拝の恵みとともに良子先生と皆様とのリスミカルで心温まるお交わりに接し、日本から参加した妻と私も主の豊かなご愛と励ましをいただき感謝である。

「ご礼拝は、「見ないで信じる」と題してヨハネによる福音書二〇章二四〜二六節から、弟子トマスの「わたしの主、わたしの神よ」の信仰告白に対し、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」と仰ったイエス様とおして、十字架と復活を信じる者には永遠の命が約束されているとの説教がとりつがれた。そしていつものように信仰告白として使徒信条が唱和された。

私は以前から、三年間弟子としてイエス様のおそばにいながら、復活を信じないと言い、一方ではイエス様と一緒に死のうと言う(同一一章一六節)調子のよいトマスにあまり良い印象はもってなかったが、メッセージを聞くうちに、少し気の毒になった。イエス様は弟子たちにはじめてご自身を現されたその場にトマスはいなかった。トマスは、どうして自分のいないときに、残念に思うと共に、ほかの弟子と比べて自分はイエス様に全く評価されていないとの思いがあったのではと推測される(私の勝手な推測ですが)。疑い深く、はっきりと「決して信じない」と主張するトマスに、イエス様はやさしく「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」とお声をかけられたとき、即座にトマスは「わたしの主、わたしの神よ」と告白した。

この告白を主は喜ばれたに違いない。教えられたことの一つは、肉眼ではイエス様を見ることができない現代に生きる私たちも、「わたしの主、わたしの神よ」と主を仰ぎ見て告白する時に聖霊のお働きにより信じさせてくださることを主はトマスをとおして教えてくださった。人間の力では全くない。トマスの告白は、今もStB教会はじめ全世界の教会の礼拝で毎週、信仰告白としてささげられている。主は疑い深いトマスをういられた。

もう一つは、ご礼拝でいつも唱和する信仰告白は愛する主に全身全霊をかけて告白することを主は喜んでくださるとの教えである。今迄、週報を見て、賛美の次は、信仰告白と、習慣化して心のこもっていない信仰告白を積み重ね、主をただ悲しませたことかと主は気づかせてくださり悔い改めた。愛する主に喜ばれる告白をささげてまいりたい。

「コロナと共に生きて」

「読書を通して」

佐藤グルーベ 道子

二〇二〇年一月十九日に、武漢で肺を侵される新型コロナウイルス伝染病が発生したと報道され、丁度中国国境の北方ベトナムに出張に行っている娘に、気をつけるようにすぐに連絡を取って以来、早半年以上も経った。

情勢は日々に展開し、今ドイツでは解放された環境の中にあって、夏休みも終わり、学校も始まり、新しい感染者千人以上と日々上昇し、第二波に入ったと言われている。

慌ただしい毎日にブレイキがかかり、今まで読む機会がなかった本を手にとることができた。最初の報道があった時にはこの様な極限状況の経験のない私は学生時代の教科書であったカミヨの「ペスト」を本棚から引っ張り出して来て、人の生き方を新たに考えさせられた。オランの街は、閉鎖され次々と死者の出る中、教会では二週間の特別祈禱会も持たれた。大きな期待を持って集まった多くの人々にイエズス会神父は二回特別説教をする。ペストは、あなた方高慢な者、心を閉じる者が受けるべき罰で、長い忍耐の後、神は望まない業を強いられた。ここで麦と麦殻とが分けられる。今こそ我々に深く考える時が到来した。神はペストを通してのご計画がある。しかしこれは返せば神の愛の現れであって、そしてこれこそ救いの機会で大きな希望を持つ時であると説いた。しかし罪のない小さな子の死を目前に経験してからの二回目の説教では、自分をも含めて我々には神のご計画は解らない、御手にすべてをお任せするべき。我々が為すことができるのは、キリストの愛を持って隣人に接する事と述べた。

即ち最後の審判、終末時の復活の希望、そして信徒相互の愛に深く根ざす行動を指すのであろう。無神論者の作者は、この説教に対して、日々多くの患者と戦いを共にし、患者の死に直面している医師を通して、誠実に自分の職務を果たし、ペストと戦うことであると言っている。その他の登場人物の其々の生きることに対しての姿勢が巧みに描写されている。

全国に閉鎖令が發布され、私達も同じ様な境遇に置かれる中、私は前向きな姿勢をとって、毎日ベルリンのシャリテ病院のウィルス学者ドクステン教授のテレビラジオ放送を欠かさず聞き、正確な情報と何かしらの知識を得ることに努めた。死亡率の高い高齢者や病气持ちの人々への配慮には厳しい処置が取られた。そんな日々の中、家族をはじめ知り合いの方々がお互い気を配り、私を守ってくれた。教会の方達は、手作りの和食や本の差し入れ、娘息子たちは、お買い物担当。義理の息子などはいつでも弾けるようにと自分

のキーボードを運び込んでくれた。一人一人の暖かい気持ちに包まれている事を知り、今までに無い喜びと感謝に溢れた。子供達のお買い物の中には、必ず私の好きなものが二、三加えられており、また小さな花束が添えられているのには、予期していなかった暖かい心使いに感激した。息子夫婦は、薬草とお花の苗を買ってきてくれ、荒れ果てていた私の小さなお庭に自分達で土を掘り返して植えてくれた。それからは、毎日その手入れが日課となり、それぞれ違った性格を持って育っていく苗を観察するのが大きな楽しみとなつていく。今では二〇個ぐらゐのトマトの赤くなるのを楽しみに、又色々な薬草を使つてのお料理に励んでいる。

お借りした本の中で神谷美恵子の「生きがいについて」では、社会を離れて自然に帰る時その時にのみ人間は本来の人間性に帰ることができる。とルソーの言葉を紹介してから、自然こそ人を生み出した母胎で、人はその中で本能的に自然の懐に帰って行き、そこにあってこそ人は休まると述べている。

閉鎖令が解除され、これからは各々に責任のある行動を委ねられている。「Tanzniden Tiger」(虎とのダンス)と言ひ表される様に、「コロナと仲良く日々を過ごさなければならぬ。愛する者を亡くし悲しみにある人々、職を失った多くの若い人々と沢山の犠牲をもたらしたコロナ。一日も早く平安が訪れることを祈り、生かされている日々に心からの感謝を持ち、私のなすべきことはと問ひ続ける。「目を覚ましていなさい。信仰に立ちなさい。男らしく強くあってほしい。いっさいのことを愛を持って行いなさい」(コロナの信徒への手紙)一六章一三〜一四節 口語訳)この御言葉を今朝与えられた。

――孫とコロナ禍を過ごして――  
 一人の男性と二人の男たち  
 フルター・ドレーアー

八月になり、今年もやがて三分の二が過ぎようとしています。この間の、私にとって最も大切な出来事は、孫のパウル・ヤコブ・冬樹のアヒトウア(高校終了資格)の準備を一緒に経験した事です。沢山の事柄が私にとって新しく、まるで私自身が受験生になったよ

うな気がしました。

パウルは、地理学、数学、ドイツ語、英語の筆記試験、フランス語と英語の会話テスト、美術史に関する口頭試験、の準備をしなければなりません。一月から週に二回様々な分野の準備を始めましたが、学校がコロナ感染拡大防止のために休校となり、勉強時間を増やすことになりました。スカイプを利用して授業をしてくれる先生もいましたが、殆どの科目は生徒の自習に任せられ、授業に出る機会もありません。五月の試験に向かうという異例の事態になりました。

試験の内容は、地理学・世界的規模の観光事業、グロバルな都市開発、ドイツ語・文章、詩の解釈、英語会話・ヨーロッパ、北アメリカにおける人種問題、植民地問題、フランス語会話・ドイツとフランスの国関係、政治的風刺画の解釈、となっていました。パウルが苦手とする科目は美術史で、二〇世紀における建築学、絵画では表現主義と超現実主義が課題となり、エミール・ノルデの作品を研究対象として選んだようです。私がなぜこのように具体的に書くかということ、試験のテーマから出てくる様々な疑問を、孫とのディスカッションを通して更に深く理解できるようになつたという、貴重な体験をしたからです。

三月までパウルは我が家を訪れていましたが、コロナ感染防止の為、四月以降はスカイプを利用して勉強することにしました。筆記試験が五月に終了した後、私たちは美術史に時間を費やしました。最初に解釈したノルデの絵は「花園、白いドレスを着た女性」、その後「湿地地帯の夕景色」、「ヒアシンスと二つの彫刻」。最後に人をテーマにした絵を鑑賞しようということで、ノルデの「最後の晩餐」を選びました。試験当日の順序で練習することにし、一五分の準備時間の後自分の解釈を述べ、それから試験官との会話、となります。一五分間絵を見た後、パウルは感じた事を話し始めました。強い表現力のある顔が特徴的な絵で、黄色と緑色は何かを象徴していると言ひ、中心の暗い色については、「男性」の顔と彼の着ている物が見える、そして大きな手、杯、……。その絵に関するパウルの説明はとても短く、あまり興味がないという雰囲気でした。それで私の感想を話し、ノルデが何を表現したかったのか質問しました。長い沈黙の後パウルが答

えたのは、「一人の男性と二人の男たち」でしょう。私はパウルに「最後の晩餐」を知っているのかと尋ねました。するとパウルはとても驚いた表情になりました。

今、二〇二〇年のアビトゥアはすでに過去のテーマになり、試験に無事合格したパウルは、これからの進路について考えを巡らせています。

先日我が家を訪れた際に、ブロンズの「最後の晩餐」が応接間にかかっているのを見て、一瞬顔をこわばらせました。すぐに笑顔になり、いたずらっぽく、「おじいちゃん、一人の男性と二人の男たちだね」と言いました。試験が終わわり沢山の事柄が忘れられてしまふことでしょうか。しかし「一人の男性と二人の男たち」の絵は、パウル・ヤコブ・冬樹がこれから歩む道に寄り添い、道を示し、そしていつかこの「一人の男性」に向かって成長してゆくことと思います。

### ボン大学での学びを終えて

永山辰原



日本で神学校を卒業した後、ドイツへの留学の機会が与えられ、二〇一八年九月〜二〇二〇年七月の間にボン大学神学部で留学しました。渡独前から多くの関係者に助けられ、留学を実現させることができました。しかし、渡独前は幾ばくかの不安もありました。その一つがドイツでの住まいでした。ドイツでは住宅不足が問題となっていることは事前に知っておりましたので、渡独前からインターネットで住まいを探していました。しかしその時点では見つからず、現地で直接探すことになりました。

その間様々な人に相談していたのですが、ある方から、ケルン・ボン日本語教会に連絡をすればもしかしたら家探しを助けてくれるかもしれないとアドバイスをいただきました。その後すぐにホームページのメールアドレスに連絡しました。それが佐々木牧師との最初のやりとりでした。お会いしたこともないのに不躰だったのですが、それでも先生は非常に丁寧に対応してくださいました。結果すぐには見つからず、渡独して一か月を過ぎた頃ようやく見つかることができました。

した。主日礼拝は、ボンにあるバプテスト教会とケルン・ボン日本語教会のそれに交互に通いました。ただ、当時まだドイツ語が達者ではなかったため、日本語の説教を聞きたいという思いが強くなり、しばらくしてケルン・ボン日本語教会のみに通うようになりました。礼拝後はほぼ毎回、シムミットさん、グルーベさん、また佐々木先生がおにぎりなどの残り物を包んでくれました。独身で学生の私にとってこれは本当に助かりました。また、藤井さんからはいつも教会関係や社会問題を扱った新聞の切り抜きもいただきました。また、クリスティーナさんとのドイツ語の会話は私にとって良いドイツ語の練習になりました。さらに、外間さん、同世代の金さんご夫妻、若い青年のかずえちゃんとの交流はとても楽しいひとときでした。私のくだらない話にも笑っていただき感謝です(笑)。その他の皆さんとの交わりもとても楽しいひとときでした。そして日本に帰国する際は、藤井さんがお金の送金を手伝ってくれました。現金を持っていくよりリスクが少なくお得なので本当に助かりました。

最後はコロナ禍で五月に緊急帰国しなければならず、皆さんに直接お別れができなかったのは残念でした。最初と最後は特に不安だらけの留学生活でしたが、このように皆さんに支えられて二年間の留学を無事に終えることができました。この場を借りて改めて感謝申し上げます。皆さん一人一人との交わりは私の人生の中で大切な思い出となりました。神が皆さんとの出会いを与えて下さったことに心から感謝しつつ、ケルン・ボン日本語教会の福音宣教と教会形成が神の恵みと御手の内に豊かに育まれますよう日本からお祈りしております。

### ◇ 報告 & 予定 ◇

◇七月十二日、オンライン同時配信で、ボンハップアー教会に於いて礼拝を再開しました。会堂使用に関して未だに多くの規制がありますので、年内は月に一回、第二日曜日の予定です。

◇「ママの子育ての学び会」等、八月より再開しました。

◇延期していた野外礼拝、例年一月一日の万聖節(Auferstehung)の祭日に行っていたバザーは、今年が聖日と重なったために一〇月三十一日に開催を予定していましたが、中止となりました。

◇九月二十七日(日)臨時総会 牧師任期に関する件  
◇礼拝・諸集会について  
基本的にオンラインで行っております。

礼拝 毎日曜日 一四時〜二五時

第二日曜日 会堂にて オンライン同時配信

聖書を学ぶ会 第一・三水曜日 一〇時〜一時 牧師宅  
第二・四水曜日 一〇時〜一時 オンライン

※子ども礼拝、家庭集会は暫く休会となります。

### 編集後記

佐々木良子

コロナ禍のために、予定していた行事をことごとく中止せざるを得ませんが、教会の皆様が守られて、共にスカイプ礼拝等の恵みに与っていることを嬉しく思っています。未だに先が見えない状況ですが、聖歌「数えてみよ主の恵み・・・」という賛美のように、今、与えられている一つひとつの恵みを数えながら、収束する日を待ち臨みたいと思います。秋の気配を感じるこの頃となり、忍び寄ってくるドイツ特有のどんよりした日々を押し潰されないように、賛美しながら乗り越えて参りましょう!

発行:ケルン・ボン日本語キリスト教会役員会  
**Japanische Evangelische Gemeinde**  
**Köln-Bonn e.V.**

<主日共同礼拝>  
 会場: Dietrich-Bonhoeffer-Kirche  
 住所: An der Decksteiner Mühle 1  
 50935 Köln (Lindenthal), Germany  
 電話: 0221-4300319 (礼拝前後のみ)  
 時刻: 毎週日曜日 14:00-15:00

<牧師> 佐々木良子 (Pfr' Ryoko SASAKI)  
 牧師館: Breslauer Str. 26, 50858 Köln  
 固定電話: 02234-9298792  
 携帯電話: 0151-2910 6278  
 Email: r310130s@yahoo.co.jp

<ホームページ>  
<http://koelnbonn.jp>

<振込口座>  
 IBAN: DE97 3601 0043 0587 6034 38  
 BIC: PBNKDEFF